

決
闘
者
(壯年編)

柴田鍊三郎自選時代小説



決
闘
者
（壯年編）

柴田鍊三郎自選時代小説全集 二八



決闘者 宮本武蔵 〈壮年篇〉

『柴田錬三郎自選時代小説全集』 卷二八

初版印刷＝昭和四九年十二月一〇日

初版発行＝昭和四九年十二月二〇日

著者＝柴田錬三郎

発行者＝陶山巖

装幀者＝横尾忠則

発行所＝株式会社集英社

郵便番号＝〈一〇一〉

東京都千代田区一ッ橋二ノ五ノ一〇

電話番号＝〈〇三〉 二六五ノ六一一一

活版印刷＝中央精版印刷株式会社

オフセット印刷＝凸版印刷株式会社

著者との了解により検印を廃止します

0393-170028-3041

© 1974 R. SHIBATA PRINTED IN JAPAN

定価はカバーに表示してあります

決闘者 宮本武蔵 (壯年篇) ————— 目次

岩不動	九
月下二閃	一五
金剛杖	二一
南蛮武士	二七
犯す	三三
巨城出頭人	三九
赤蜻蛉	四五
廃屋慘状	五一
復讐団	五七
矢文	六三
供養舟	六九
山犬	七五
修羅賭場	八一
意馬心猿鬼	八七
敵討街道	九三
後藤又兵衛	九九
武辺と兵法者	一〇五
慟哭	一一一
網	一一七
他界の言	一二三
男根説法	一二九

毒酒	一三五
妻六出現	一四一
水中策	一四七
市仏	一五三
小野次郎右衛門	一五九
江戸兵法	一六五
夢想権之助	一七一
自然方則	一七七
血統願い	一八三
春情戒	一八九
不意討ち	一九五
逃げ水	二〇一
武蔵野娘	二〇七
狐塚	二一三
嫉妬太刀	二一九
業力	二二五
武将の子	二三一
相思無残	二三七
二刀流伊織	二四三
忍者討ち	二四九
闘鶏	二二五

贗者墓	二六一
予感	二六七
子連れ和尚	二七三
二天一流	二七九
女体	二八五
八幡船	二九一
再会	二九六
剣二道	三〇二
長島	三〇八
迎え撃つ者	三一四
邂逅対立	三二〇
魚心庵老人	三二六
賭独楽	三三二
木太刀	三三八
剣相	三四四
その行方	三五一
試合を待つ人々	三五七
小次郎敗れたり	三六三
その最後	三六九
後記	三七五

決闘者

—
宮本武蔵

壮年篇

岩不動

(一)

澄みきった秋空に、力強い、鋭い音が、連続して、ひびき渡っている。

海に向って突出した山腹の巨大な岩が、あげる悲鳴であつた。

岩の上から、臥竜のかたちに老松が、うねり出て居り、その幹に太綱が、かけられて、十数尺下の横木を吊るしていた。

鞆たもとに腰かけている者が、鑿のみと鋤つちで、岩を刻んでいるのであつた。

彫られているのは、どうやら不動明王のようであつた。剣の大きさだけでも、十尺を越えている。

もう八分通り出来あがつていて、背の迦楼羅かろうら炎えんも、ほぼ完成している。

それにしても、これは、危険な作業であつた。

足下は、絶壁がえぐり取られたように内側へ彎弓わんきやうして、赤土の山肌をむき出し、疎林を配した渚は、数丈もの下方にひろがっている。

ひとつまちがえば、五体は、渚にちらばる岩へたたきつけられて、碎けるであらう。

彫っているのは、蓬髪、髯だらけの、ほとんど乞食同然の身装をした男であつたが、双眸から放つ光は、兵法者のものにまぎれもない。

この危険な作業は、半年前からはじめられていた。

この海辺から、村里までは、二里の距離があつたが、毎朝、さだめた時刻に現れて、終日、鑿を打ち込み、昏がた戻って行く日課を、ただの一日も欠かさずに、つづけているのであつた。

左様——雨風の強い日も、休もうとしなかつたのである。

ここは、ふかい入江になって居り、沖は、いくつかの島で、遠望をさえぎられていたが、わざわざ、舳先をまわして、この危険な作業を、見物に来る船も、あつた。

「なんの発心かのう？」

仰ぎ視る人は、一様に、首をかしげた。

渚まで船を寄せて、口に手をあてて、問う者もいたが、彫り手は、応えようとはしなかつた。

その手は、憩うということを知らぬようであつた。

仰ぐ人々は、なにかの執念にとり憑かれてに相違ない、と考えざるを得なかつた。

洛北瓜生山麓・一乗寺村下り松に於いて、吉岡道場の面々七十余人と死闘してから三年、杳として行方を絶つ

ていた宮本武蔵は、この瀬戸内海に面した備前国邑久郡虫明にいた。

頭上の松の密林に、人の気配がした。

「武蔵様——」

呼んで、岩蔭から、顔をのぞけたのは、十六、七の娘であつた。

眉目は整っているが、色が黒く、いかにも野性味に富んで、表情がいきいきしていた。

「お客人ですがな。今日は、仕事は中止なされ」

「誰だ、客とは——？」

「長船の刀工さんじゃがな」

「うむ！」

ある時、隣村福
扉に鉄鎖をまきつ
た長光が、この鎖
四方に鳴りひびか
その刀が召上げら

宝蔵院から、出火した。宝蔵が、
いたので、開きかねた。馳せつけ
両断して、その斬れ味の訝えを、
ん。このことが、宮廷にきこえて、
御物となつた。

大永の頃、大洪水があつて、長船鍛冶の家は、ことごとく濁水に吞まれて、断絶したが、わずかに、祐定の家が残つた。

長船鍛冶の盛んであつたのは、鎌倉幕府の中頃より天正年間までであつた。その間、輩出した名工は、千を以て数えられた。

祐定という名は、文明年間より、その父子子弟が相繼いで、この慶長年間までも、残している。

武蔵が、当代祐定を、長船村に訪うたのは、「飯綱使い」松山主水から、

「兵法者は、名刀を持たねばなるまい」
と、添状をもらつたからである。

二年前のことであつた。

祐定は、添状を読んでから、

「打ちあげるまで、しばらくの猶予を下され」
と、云つた。

そのしばらくが、二年という歳月であつた。武蔵は、待つたのである。

(二)

武蔵は、太綱をつたつて、岩の上へ、よじのぼつた。待っていたのは、赤音という娘であつた。虫明村の娘ではなかつた。

山中に、修験者の道場があり、入山していた修験者の

一人が、船が難破して浜辺に流れついた船頭の女房を、拉致して、産ませた娘だ、と武蔵はきいた。

赤音は、十歳頃から、修験者から見すてられた道場に、一人で住んでいた。

道場と一町ばかりへだてて、裳掛寺という無住となつた山寺があり、武蔵の方は、そこへ、勝手に入り込んで、寝泊りしていた。

村里までは、勾配の険しい杣道を、赤音の足で、半刻をついやす。

いわば——。

漂泊の兵法者と修験道の落し子とが、地下人の白い眼の中で、肩を寄せ合つて、山賤同様のくらしをつづけているのであった。

「武蔵様——」

先に立っている赤音が、振り向いた。

「うむ」

「不動様ができあがるのは、もう間近でしようがな」

「うむ」

「できあがつたら、武蔵様は、どこかへ行つてしまわれるのじゃろ？」

「うむ」

「……うちらは、また、一人になる」

赤音は、自分に云いかせるように、呟いた。

赤音は、武蔵がたのんだわけでもないのに、食事をつ

くつてくれていた。

「武蔵様、お前様が立ち去る時に、うちらを供にするわけには、いかぬのじゃろうか？」

「……………」

武蔵は、返辞をしなかった。

と——赤音は、その場へ、土下座した。

「おたのみ申します」

必死の面持で、合掌した。

武蔵は、その脇を、黙つて、通り過ぎた。

「やっぱり、駄目なのじゃな」

赤音は、しおしおと、起つて、あとに従つた。

武蔵は、崩れかかった山門を入つた。

黒井山裳掛寺は、慶長五年の関ヶ原役で、石田三成に

味方して、敗走した宇喜多秀家が、故郷へ遁け歸つて、

三月ばかり、かくれた古刹であつた。

もともと、宇喜多家は、この邑久郡から興つていて、

裳掛寺は、秀家の祖父直家によって再建されている因縁を持つていた。

秀家が捕えられて八丈島へ流罪となつた時、裳掛寺住職も、秀家とともに流された。爾来、無住のまま、狐狸のすみかとなつていたのである。

武蔵は、荒れはてた本堂に寝起きしていた。

本堂で待つていたのは、長船刀匠祐定であつた。六十過ぎの、鶴のように瘦せた老人であつた。

膝の前に、色褪せた布で包んだ刀一振を置いた。

武蔵が、前に坐ると、祐定は、挨拶もせず、

「打ち上げ申した」

と云って、布を解いて、白鞘のそれを、さし出した。

「忝ない」

押しいただいた武蔵は、すらりと抜きはなつと、直立させた。

鉈子から、ゆっくりと、食いつくように視線を下げてゆく武蔵の眼光は、人間ばなれしたものであった。

鵜首造りの鉈子、青い地鉄、浮きやかに白い刃、匂いふかい刃境、鉈はすくなく、八重桜の散ったような華やかな丁子みだれ、ふかい反、厚い重……。

武蔵の凝視は、長い時刻を移し乍ら、われを忘れたかのようにであった。

祐定は、身じろぎもせず、その武蔵の顔を、見まもっていた。

ようやく――。

白刃を鞘に納めた武蔵は、

「みごとな出来ばえ、あつくお礼申し上げます」

と、頭を下げた。

祐定は、偏窟者らしく、無表情を保ったまま、

「気に入られたのであれば、これは進呈いたすが、その代り、ひとつだけ、条件をつけさせて頂く」

「なんなりとも――」

「向後、お手前が、真剣で試合をされる時、^{あて}相手の所持の刀を、お調べ頂きたく存ずる。天国か、三池鍛冶か、千手院か、来一類か、粟田口か、福岡一文字か――。必ず、お調べ下されて、それが、もし折れたり曲ったり、刃こぼれしたりなどしたならば、いちいち、わしが許まで、お報せ下さるまいか。……もし万一、この祐定の作った品によって、お手前が負けられた際には、見とくの人、その旨を、くわしく、したためさせて下さることを、お願いつかまつる」

「承知つかまつりました」

「では……、ご武運のほどを、お祈りいたしますぞ」

祐定は、赤音がさし出した茶も、口にせず、さつさと立ち上っていた。

境内に降り立った祐定は、ふと、思い出した様子で、

送って出た武蔵を、振りかえった。

「お手前は、海へ突き出た岩を彫って、不動尊をつくって居られる由じゃが……」

「あと一月あまりで、完成いたす」

「一月！ それは、ちと、日数が、かかり過ぎる」

「それがしは、すでに、半年も、日数をついやして居り申す。あと一月ぐらい――」

「いや、池田家で、お手前が不動尊を完成させるまで、待ってくれるか、どうか、ということでごさるよ」

「それは、どういうことです？」

「わしと前後して、池田家家中が数人、この虫明へ参ったが、どうやら、大がかりな宝さがしをやるそうな」

「宝さがし？」

「おっつけ、当寺へも、役人が参ろう」

祐定は、それだけ云いのこした。

(二)

「武蔵様っ！ 武蔵様っ！」

夜明けの静寂を破る赤音のけたたましい叫びが、武蔵のねむりを、さました。

本堂へ駆け込んで来た赤音は、息をはずませ乍ら、

「武蔵様、お役人が参ります。……逃げて下され！ お

ねがいじゃ。はよう、逃げて下され！」

「おれが？ ……どうして、役人が来たら、逃げねばならぬのだ？」

「だって、武蔵様は、……そのう、ざんげのために、不動様を、彫っておいでじゃろうから……」

「べつに、懺悔滅罪のために、不動明王をつくって居るのではない」

「ほんまですか？」

赤音の顔は、不安の色をみなぎらせていた。

「おれは、罪人ではない。多勢の人をあの世へ送ったが、試合で、斬った。後めたいことなど、ひとつも犯しては居らぬ」

「ほんまじゃな？」

「くどい！」

武蔵は、渡廊下から庫裏を抜けて、台所に行き、懸樋から落ちる冷たい水を、双掌に受けた。

庫裏は、住むに堪えないくらい荒れはてていて、屋根も天井も破れ、床も抜けていた。

台所だけは、赤音が、使えるように、ととのえてあった。

赤音は、竈へ薪を焚きつけ乍ら、なお不安そうに、板敷きで、鑿を研ぎはじめた武蔵を、視やった。

境内に、話し声がきこえた。

屋内は吹きさらしなので、境内に立った者たちの姿が、台所からも、眺められた。

陣笠をかぶった武士が、四人であった。

本堂を覗いてから、庫裏へ近づいて来た。

「その牢人に、申し渡す」

縁さきから、一人が、声をかけた。

「本日限り、当寺を立ち退いてもらおう。いや、この黒井山から、退去してもらいたい」

その命令をきいて、武蔵は、はじめて、手を止めて、視線を向けた。

「それがしは、岬の岩を刻んで、不動明王をつくって居り申す」

「それは、村民から、きいた」

備前二十八万石池田家の目付は、こたえた。

「完成までには、あと一月あまり要すると存ずる。それまで、お待ち下され」

「待てぬ！ 即刻、立ち退け」

「御辺がたが、なにをされるのか存ぜぬが、べつに、邪魔だてするわけではない。お見すておき下され」

「黙れ！ ……わが池田家領地に、勝手に入り込んだばかりか、無断で、岬の景観をよごすことさえも、不埒なのだぞ。が、その罪は、看のがしてくれよう。……つべこべ申さずに、早々に、何処へなりと、去ね！」

「……………」

武蔵は、返辞をしなかった。

目付たちは、武蔵が承知したものと、きめたらしく、ほかへ廻って行った。

赤音が、粥を碗によそおって、さし出し乍ら、

「どうなされるのですか？」

と、問うた。

「どうもせぬ」

武蔵は、粥をすすった。

「どうもせぬ、というて、……立ち退かれますのか？」

うちらも、ここには、住めなくなつたので、お供をして、よろしいかな？」

「……………」

武蔵は、いつもの通り五杯食べると、立ち上った。

赤音は、武蔵が、鑿と鎚を容れた革袋を、腰に携げるのを見とめて、眉宇をひそめた。

武蔵は、岬へ向って、歩き出した。

「武蔵様！」

「……………」

「武蔵様！ お役人衆は、まだ、そこいらに居られますぞな。……さかろうたら、大事になるがな」

武蔵は、耳などないように、ずんずん、徑を進んで行った。